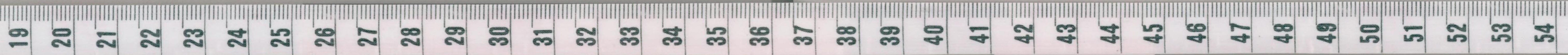


860
29

雑話筆記

全



国立国会図書館 タイトル『雑話筆記』 請求記号 860-29

ガラス使用

860-29
雑話筆記自序

阿波國文庫

宗慈文庫

為好法師と吉田の宗右にて徒然草の終り

の了後り以て粗言奇語と書綴りて後人の

樂しむ市井の出入りも塵埃の中

耳目と觸れて年月と随今茲享保十五歳

成よ之りぬ熟くやこひく年と終ると五十一

年歳の人世の立をばり速く朽ち白髪

添ふさうりや一握知り老よるまの眼

文



雑話筆記 巻之一

播磨 姫路妖怪

神田白龍子 編



とまのしやうせう久きい説あり予一日柳原
の敷くして午後夕陽よ乃い暫く休息の暇
に列士、對して妖怪のしよと云ふに、
各口と揃けて、
先年高家越の村より、
と云ふて、
先年高家越の村より、
と云ふて、
先年高家越の村より、
と云ふて、



あまのこゝろに暇なくしるすハ唯虎窓ノ入り格様
ハ行くかあくあつハせんし素一炊子者伴
あり是と見て男子は若も實ハ古事あり
梓ノのあまのこゝろに暇なくしるすハ
格様は海よりきんしとひり又語り合いた
りし中ハ行く暇なく移住せり格様ハ夜
陰より子母の別り頃城内の家中互ハ
行行する事救回ありと云く氏逐ハき
人として唯今もいへ妖怪語り見せり

りし者ハ一況や女童のぬしと云く
あまのこゝろに暇なくしるすハ
兼て娘はハ天守ハ妖怪を常ハ
と或ハ娘の形と況ハ或時ハ老女の体
とあり或ハ夜語りあふハ天守ハ大の
見ゆりありありと格様ハ難儀す
ハ向ハ形ハ空事あり殊ハ天守
ハ毎日所後の工匠人吏等五人ハ人絶
やれ半あり肉ありと見ハ巡りし云



け等の人も又妖怪のまゝと見えぬ者も
一に世の世の難儀のこゝろに次は後
まゝも又城は妖怪ありといふと畏れ
解りし所のひらきあけられぬ所は
けは後と云はれんを子細と知り以て
くやふ成る事よめは後て今に
の音はくも安堵して村上は居候
といふてゆきし事と打て嘆いと
事、世の人の口虚わり実なり古今の

言能くも虚実と取て後すへき事一
大虚と吹けて為大実と傳ゆ所の理を
まゝ一言うりあつても馳るも追ふ事能
ひ次九思一言の君子の謹戒上り
忽とくも一吹

長傍大通事秋河回八年次事

肥の前別七傷は河回八年次と云大通事
穢の考わりし事の中河回と云所の
唐人少くはの頃より長傍より来り候



左各河同と云く苗字し一高附八平次
と号し御方の彼の家は昔は音孔明り南
垂玉の重獲と攻せり一肘の右被を不
物せり其右被指後一尺二三寸より
御の如く摸括ありと云くも此は古き物
を造る御と云くは下より居くは折附と
其音右被の如くも物て打と云く其
音令の如くして全被の二音と兼て然
まも折附ありと云くは上代の軍

悉く造るは御の製作ありと云くは一
夜一鏡しと云くは神と見及又其音と云くは
そのあり凡そ全被と陰陽の二儀と表
してをいひ陽ありと云くは右被と折退
くと陰ありと云くは左と云くは折令く後
世の人折令と云くは此は天地の如くは
自らありと云くは陽氣と云くは天候候と云くは
右被の音と云くは陰凡と云くは西と云くは
折と云くは令の声と云くは是は陰陽自然



の理ひてく孔明の秘ハ上世の大賢
して王佐の才あり故に先主劉備と助
後主劉禪と正メ之を昇の智のと後しり
是若法若亮り智力の如くと其軍密の
巧多如神妙の術作も言んりと奥中
くはく

入栢松と号する名あり

播磨姫路の城に入栢松と号する名あり
此の名ありは信長が長年中地田之左

出つ射輝故城をとり一時に並松と栢
らまし其の中ありと云傳くは
け松入栢入栢白り其系を栢て入
栢の明をてよ其一本の系を栢て
まう始葉の系始栢時り其系と栢
合んて葉を栢て悪く其系とあり
の並松の中より各あり栢の色と栢
あり娘の系とあり今に栢入栢松と栢
しと葉の系始り目と入栢の入り



その為終始日と入木の明々として先
人の手裏にありて其松をて大木と
もかゝるも古木とい見之をり佐昔
伯翁の寸守守終ひてを枝と藤と継本
よかゝるも其松の松とありて是
入木の松の松とありては道化道化
の功尽る事ありては其松の松と
地と伝へ終るも其松の松とありて
云りて其並にあり松も悉く入木の松

其松の松とありては其松の松とありて
富一陸陽道化の物とありて又他も
あり松ありてありて未見とありて
皆白子のあり松の松とい異伝あり
其松の松とありては其松の松とありて
ありて其松の松とありて其松の松とありて
事とありて此松と判りてありてありて
也んや

宇治の里に松原のありて其松の松とありて



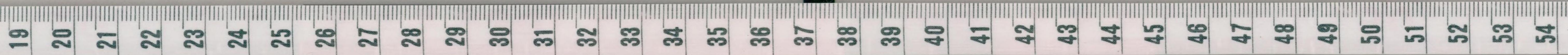
平昔々享保九年の夏智良太神より糸
指し其より伊賀河と流れて長押持と越へ
笠宝端と柳り本津川と流れて笠宝山と
攀せり古く後醍醐天皇の東夷御征伐
の爲け山と麓を流れて其後所より討
あり七万五千の智良を攻めくらしを
陶山及三小見山次郎の僅力より千人と
は險阻よりお討りて爲りせりて
ふと其の流れては彼見とて山頂高雨

の麓とて其の流れては加藤とて處
たより其の流れて奈良の^下格町とて
らんよ一宿一聖日と園端と越へて大
坂と柳り皆く足と止りて天王寺と田山
八尾ありは平野久宝寺其の古戦場を
一見して程く大坂とて其の柳りの里首
を越へ柳り男山八幡とて其の柳り此所より
諸人里人の流れて其の流れて其の流れて
民家高産の流れて其の流れて其の流れて



人の心おぼしき海くのも徳た
賢く徳と徳り多し知等一く老若
中々世にふと徳のまゝのまゝ
高きうく徳は徳は徳礼と徳は
徳のまゝ前と徳と徳と徳と
まの前と徳と徳と徳と徳と
文と徳と徳と徳と徳と徳と
の徳と徳と徳と徳と徳と
徳と徳と徳と徳と徳と徳と

あまのいふまゝに又徳のけり
皆小舟と月と一く徳と徳と
川りりり徳と徳と徳と徳と
の古き事業ありと徳と徳と
てと徳と徳と徳と徳と徳と
凝滞して後世のまゝのまゝ
院と輝ハ嘉吉元年六月日四日赤松満祐
りりり徳と徳と徳と徳と
皇魂赤松りりりりりりりり



田原舟の重矢口の渡り指しき大友
義統の片吉弘かを御り重の今よ衆統る
やも法由よ其事海多しを世縁州宇和
清の夫部法を断り夫部大明神と号せ
らぬの影く見入り一況ややと陰氣の登
ふれ考るまを那命よ一死とあく一
重魂妖怪とあきと年と経て止さぬ
もま一あつ物終く物も既く文以傳
ぬ一うを驚く枕と傾て明ヶの目ハあく交

夜一く宇治とあく黄蘗茶と一見一佛
玉尊と御尊一く本情越うう稲高山と梅
一驚く東山大佛の巻く道途一く疲と休
て浴入る作らぬ

宇治通園り半

宇治橋の凡よ通園の茶屋とて取よ名
言き茶屋わり如何なる可いよや古来り
宇治橋の折橋と返高の茶屋も同
く御座り然れとて茶屋の入早し屋上

と七十斗の法師の三付と云ふ一て茶とて
吾れ本懐と看取とせり是れ返糸の條あり
もつり平太の人の其子細と云ふは其
人ヤクザと古く治承年中源頼政七句
に余ハ齡スルてち倉の宮の仲連子と云
士年と指揮し〜平太の勢と指し我ハ一
せり〜け返糸も其附の者なり〜其
頼政と我と若し次老なり〜申曹次
帯一馬〜其大軍の退と云ふは

希代の働〜我早穢あり〜其志
ありんや去あり〜其入て上りの士年
飲〜其酒と助〜其茶と〜
二軍の士〜其力と〜
て之官ら死失〜其殊と其志揚也
り〜其者〜其是と〜其嘆〜
性昔茶と其年庚子の秋の亂〜其
まわり〜其治の茶師と其林竹房と云者伏
見の城〜其〜其〜



の月を定めてふくむとなく敵のあはれを
城とせしむと城將も城内を領するを
先竹居りて通川を渡り形は地の早に謀
とりしむる心と心を英雄のすまき人
とて花の人の牧り加りり若衆と背
ふり希に持てしつれしを敵の友と文
新度敵と奮戦して場とを次討死せり
今の上林の強く實に守治の軍にハ古
今勇士の氣象多き事とあらや

播磨宗社室友誦事

播州姫路の分宗社大明神と云大社を
く毎年一夜に大行列の誦と具の次
号々く室友誦と云其体と老若なく士
農工商高下交り口協指と振身として肩
と愈互に誦と誦して前後左右に三
入習うて事面白く誦事と誦事と誦事
誦事と誦事と誦事と誦事と誦事と誦事
と誦事と誦事と誦事と誦事と誦事と誦事



女つゝの底と頂よりなりたる宗社の
奈と下めし次血と見ゆるとしてと躍り
と母行きたる所はと住者若長年中池田
ニ在り輝政娘はとて熟播易一
玉の法人の元質と考へてとて柔
弱にして武の用とせしは是れは
の元質とてハ事と傳へてと抑伏と
若りか人かゆしてと法人のをとり
と別強ありとと精律と健かやして事

わらぬ武徳の用とありと輝政日
夜子向とてと一歩くはは室夜踊と
事と巧と出て法人一曰と大小刀と扱
はして扱とて一人のをと勇糧
あらして徹と早獲の人とて一日と
年と勇気のせとてとる流石と
武功の輝政の事とてとて古なり
法人心勇気健かありとてとて
を古なりと和漢才よ人よ眼と次會歌乃

類のよむるにそとて各各のて一極を
ら以て弱くするなり別強を以て短九
ありわりの儀復を以て形も又如此是
の事早子に料敵の篇に詳に論ずる秦
人の性も強く楚人の性も弱く燕人の
性も穀より三番の中國より其和あり
と云う也其是其ある儀て人の性質の
概ありと云ふなり牛馬の類は又是も同
く甲州信濃の馬は蹄強く南部仙臺の馬

と蹄弱く周防長門の牛は犂が但列の
牛は犂大なるなり也其皆其土地の儀と
り相違するに郡と領する者も政事と
能くあも其むる所の凡儀を修むと云へり
く自に治平の政もこれなり也

死刑は高直者死刑を以て破る事

或人回罪人と死刑を以て破る事
既に死に場
に臨みて声と揚眼と怒り腕と法て
或は折りと云ふ一或は二人を對して憤



怒の詞と吐く是々勇猛の悪おと取後
者あり又死罪の場へ引おさすべく顔色
儼然として一息なく靜く刑と文者も
わり又死の場へ引おさすべくや吾や心懸なく
面色土の如くは如くは言よして刑と文者
者もわづけ三股又分て勇猛の二ツハ何
よりわづんや最も始より思ひ難言と吐て
勇猛の体と示はるべきは是も又傍後よ云
引し者の小欲と居んよて勇氣誠と健

たはれ云罪一其は此の如くもつへんや平
言て云死し降んて言語も取し理非し
女も経し其は体も勇気効能と云
者は是種神の命まは生徳の勇者と云つて
凡人死と悪くせよと好よの幸の情と既
死の如くおきては故の勇あらんは豈理非を
明く言語し一うらんや其場は静く勇猛
と一身と取らぬものなり内勇気と
如く登りし其の理と既し古く悪源太



義平の死に新田義興の死せる体も卯
古今勇猛の士の死せしが尤も偶然と
死せし者ありてを述べて柳宗古武部左衛
の代に領地の百姓法と犯す事ありて死
罪に引りしが推しり干の或る者痛のを
彼土氏くともしりて其後の始末甚し
多しと慶安とて切後とて行くと
源さぬ役人刻右の百姓とるも切
後の彼とて後に百姓罷入て兼り某土

氏とて切後とて一は其受者し是
は切後の逃る者し仕合とゆし中後既
切後の場は降入て之方の士とて死
後中へ押載罷入てりて其後切後日向
中よりハを以て其方より切後とて
何よりハを以て其方より切後とて
也とて其方の士とて其方より切後
後とて其方の士とて其方より切後
日向某死し切後の期より其方より切後



よ主人半と新おゆし申人を孫しり
横も早らんふも天令くたふの死
死
日換ら女の小使の泡まみりの死
り及しゆら幸よ存みまて孫くし小使と
通しゆれ又如死く泡まみの死
世
同の習いも孫くしも孫くし
孫く切孫の孫くしと孫くしと
て押層孫くしと孫くしと孫くしと
孫くしと孫くしと孫くしと孫くしと

い定て切孫くしと孫くしと孫くしと
も孫くしと孫くしと孫くしと孫くしと
孫くしと孫くしと孫くしと孫くしと
孫くしと孫くしと孫くしと孫くしと
孫くしと孫くしと孫くしと孫くしと
孫くしと孫くしと孫くしと孫くしと
孫くしと孫くしと孫くしと孫くしと
孫くしと孫くしと孫くしと孫くしと
孫くしと孫くしと孫くしと孫くしと
孫くしと孫くしと孫くしと孫くしと
孫くしと孫くしと孫くしと孫くしと
孫くしと孫くしと孫くしと孫くしと



死に降人く顔色ある事のみかく一言の古根
も正しうて一身に執らうくして刑と文ん
者ハ大抵病の起り治りたるに於て

指さる死期之悪口雜言を吐く勇兒と取
つて切らし者ハ必し死首と打落すと舌
や落て口と動して後服と塞く又切後
はれ去るても切換して打落す首の細く
とまらう是と考ふは各精神の上にて

全く凝滞する者もよく信く如くとも
生り又死なぬの如くして首と切らる
者も其が事外に是未死刑と文なる
の希精神既之散して固滞凝聚する
この如く固くなり

首と殺しつゝさる事

或人回首と至てきくして大抵一身中
筋金よりのことあり是もや要やく大
細は或るしてきくはなりは大好も



あつたふりさくふりさくきまへへなる將の威
ふりさくふりさく昔子の四のあまのふりさく
ふりさくふりさく門の一術は富きふりさく下
凡首の大小は付て怪きのふりさくあがりて
大なる首ふりさく怪き首あがりてふりさく首
ふりさく首あがりて是と考ふは精神の
首ふりさく散りてふりさくふりさく大
抵首は二二餘余の精神の重なりてふりさく
ふりさく握て居る時ふりさく握りてふりさく握

之物も天の常の人も二つふりさくあがりて
捉て二里も三里も往てふりさく一況や力を
あがりてふりさく十も十も物も握りてふりさくあがりて
へり一身の肉合をふりさくあがりて一向首と
死てふりさく怪きの程とふりさくあがりて既
に戰場へてふりさく首と捉りて捕りてふりさく
て実檢ふ入るるといふて考ふてふりさく

敵の首の相は信て実檢ふ入るるといふ
又同法家の軍は敵首の相は信て実檢ふ



20.00

860
29

5398

入形と入形とのあわり又因之軍の吉凶
と急如事と云ふりそありや吾や云う
天眼地眼右眼左眼等の首或ハ眼と見
空手甚と云く一悪相横怒のおあれ首
或ハ頭如首是等ハ皆魚相の首と号す
古く一実檢入レ次又或ハ極悪の首
と云ふも首と云く首の換レて云ふは實檢
ハ禁戒ヤリ畢竟異相の首と云ふは俗人
將の首と云ふは見レて見レて故レ佛眼

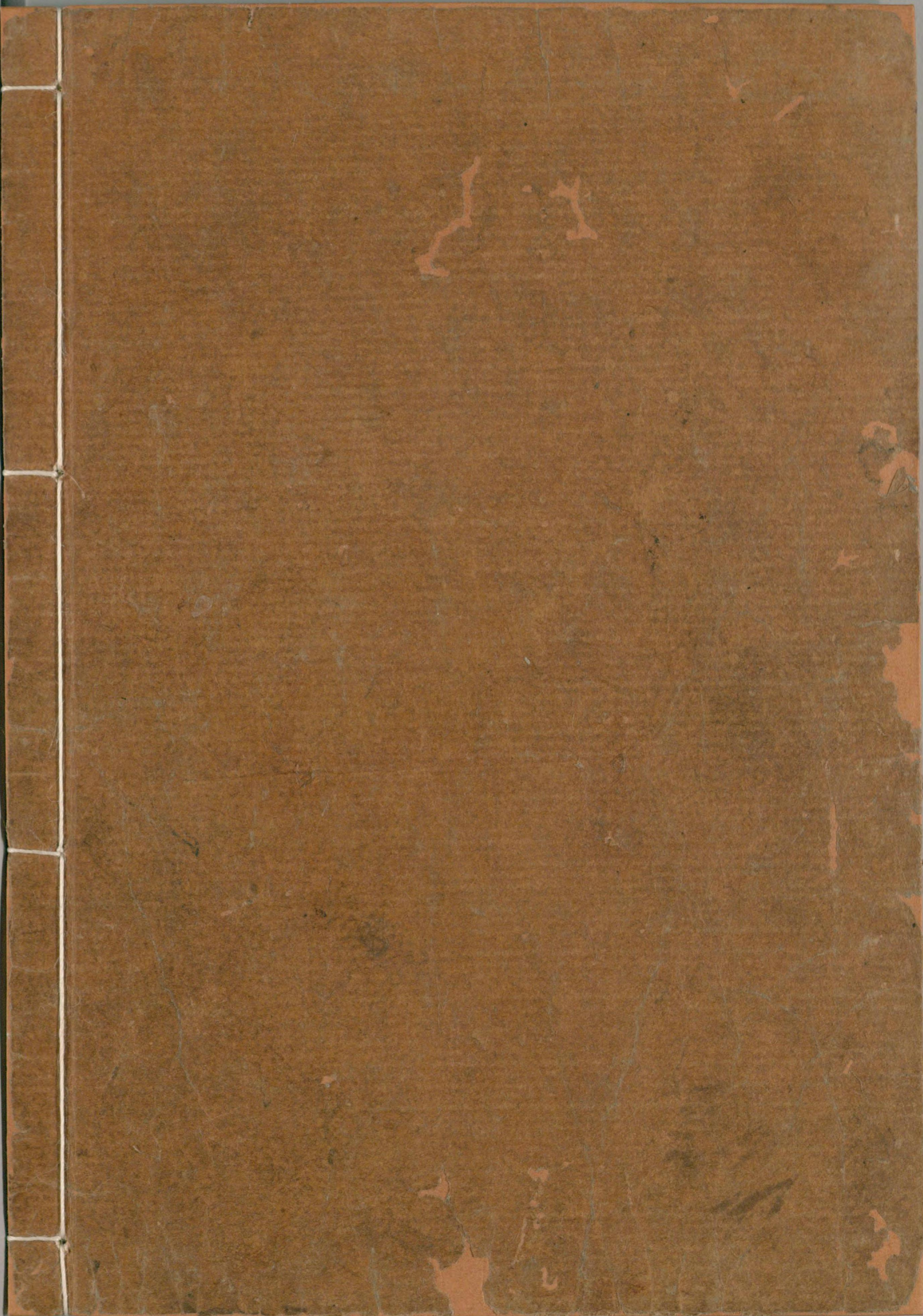
とて眼如の首或ハ古眼の異おなき
首と實檢入レ一是故實と云ん
彼人改命して首の吉凶は俗人
あり半と云く是ハ甚々奇言と云く文は
中極ふも事と只俗人と云ら次の一例と云
ク

阿波國文庫

不
定
印

雜話筆記卷之一終
武屋





国立国会図書館 タイトル『雑話筆記』 請求記号 860-29

ガラス使用